

「文学」と コミュニケーション

—古典の「評論」を読みながら
考える

風間誠史

(三省堂国語教科書編集委員)

「国語」の教材が「文学」偏重であることが批判され、言語技術あるいはコミュニケーション能力の育成が強調されるようになって、もうずいぶん経つ。しかし現場で生徒と向き合っていると、そうした「美しい国語教育」は空疎に思える。いま求められている（つまり欠如している）

空疎なことば遊びになってしまふ。実際に古典和歌の世界は常にそうした危うさを抱えており、だから間歌的に「心」の重要性を思い出す必要があった。

このことは携帯メールでのコミュニケーションが日常化している生徒たちにとっても身近な問題のような気がする。絵文字（というか記号文字）を含めて、さまざま「表現技術」が次々に発明されてゆくなかで、本当のコミュニケーションはどこにあるのか？そんなことを考える契機になれば、と夢想する。

コミュニケーション能力とは、小手先の技術ではなく、他者との深い関係性を通して、自己を確立する体験だからである。不格好でも、「文学」するしかないじゃないか。

今回三省堂『高等学校古典 古文編』を改訂するにあたって、「評論」単元を設け、いくつかの新材を加えた。しかし、それは決して「文学的教材」からシフトしたわけではなく、むしろより深く「文学」と出会ってほしいと考えてのことである。

新材の一つとして、藤原定家の『毎月抄』から、和歌の「心と詞」を論じた一節を取りあげた。心（内実）と詞（技術・技巧）のどちらが大切か、あるいはどちらが第一義なのかという議論は、和歌の世界では最も普遍的な論点の一つである。そして、これは和歌にとどまらず、まさにコミュニケーションの普遍的な課題ではないだろうか。自分の思いを他者に伝えるには、技術・技巧は不可欠である。しかし、技術や技巧だけが一人歩きしてしまえば、それは

同様のことは、継続教材だが『去来抄』の「行く春を」にも言える。芭蕉の「行く春を近江の人と惜しみけり」の句に対し、弟子の尚白は「行く歳を丹波の人と惜しみけり」でもいいのではないかと言うのだが、たしかに表現（技術）としてはまったく等価としか言いようがない。しかし、作者には「行く春」でなければならぬ、「近江」でなければならぬ理由がある。それを受けとめたときに、はじめでコミュニケーションが成立し、そこではじめて発句が発句に、ことばが表現になるのである。和歌や発句の短詩型文学の伝統は、もしかしたら携帯メールにこそ受け継がれているのではないか？というのも夢想の域を出ないが、ともあれ、生徒に問いかけてみたい。君は何を伝えたいのか？と。

《談話室》

かざま せいし 相模女子大学教授。